

【掘立柱建物跡】

建物全体を掘りくぼめる竪穴建物と違い、柱を立てる部分だけ穴を掘って建てるのが掘立柱建物です。

調査区南端で見つかったSB48建物跡は、建物全体の大きさが東西3m×南北4m以上、柱の掘方で1番大きなもの(柱穴1)は幅一辺約80cm、深さ約1mで、とても立派なものでした。写真8は柱穴1を半分掘った状態で、白線で囲った部分が柱をすえていた痕跡「柱痕跡」です。柱痕跡の直径は約25cmあります。

今回の調査区では建物の一部しか発見されていませんが、今後南側を調査することで、建物の正確な規模や構造が明らかになることが期待されます。



写真8 SB48掘立柱建物跡 柱穴1



写真9 SX34土師器焼成遺構 土器出土状況

【土師器焼成遺構】

地面を掘りくぼめた穴に、土器と燃料となる薪まきなどを入れて、灰でおおって焼いた土師器づくりのための穴です。今回発見されたものは楕円形や隅の丸い四角形で、大きなものは長軸3mほどありました。地面の一部がオレンジ色に変色していますが、これは土器を焼いた際、高温(推定600～800℃)で地面が焼きしまった痕跡です(写真9)。

また、土師器焼成遺構からは多くの土師器片が出てくるのがよくありますが、これは割れたりひびが入ったりした失敗品を置いていったものです。

今回の調査区では10基もの土師器焼成遺構が発見されていますので、ある時期には土師器づくりの拠点になっていたことがわかりました。



図5 土師器焼成遺構の想定図 (窯跡研究会1997を改変)

4. 調査成果のまとめ ～古代生産遺跡の発掘調査成果～

- ①発見された遺物から、今回の建物群や土師器焼成遺構は8世紀の終わり～9世紀の中頃のものであるとわかりました。
②土器づくりに関連する施設や、土器や瓦がカマドの芯材や周溝のふたなどに転用されている状況がわかり、当時の竪穴建物の構造の一端が明らかになりました。
③遺構の重なっている場所では、竪穴建物群の後に土師器焼成遺構が作られており、土地利用の移り変わりを考える上で貴重な資料となりました。
④彦右工門橋窯跡は、瓦・須恵器・土師器と生産の主力となる製品を変えながらも、長い間周辺の人々の生活を支えた工業地帯だったと推測されます。

●発掘調査は来年度以降も続きますので、今後の成果にもご期待ください。また、県のウェブサイトには調査状況をより詳しく掲載しておりますので、下記のURLやQRコードを参考にぜひご覧ください。



2020年発掘調査情報 で 検索 (宮城県公式ウェブサイトの文化財課のページ)
URL: https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/hakutujyouhou2020.html



蓮華紋が表現された軒丸瓦 (昨年度8区より出土)

ひこうえもんばしかまあと
彦右工門橋窯跡
～大衡村は奈良・平安時代の大工業地帯～

1. 調査要項

所在地: 大衡村大衡字萱刈場・字吹付
調査原因: 国道4号拡幅工事
調査期間: 【令和2年度】2020年9月3日～12月25日
調査面積: 890㎡ (対象面積約1600㎡)
調査主体: 宮城県教育委員会
調査協力: 大衡村教育委員会
調査担当: 佐藤渉、伊東博昭、風間啓太
遺物量: 遺物収納箱約70箱



写真1 調査区遠景(南から撮影)

今年度調査区 昨年度調査区
須恵器窯推定箇所

2. 彦右工門橋窯跡の立地(大衡窯跡群)と概要

彦右工門橋窯跡は奈良～平安時代を中心とした遺跡で、以前から須恵器や瓦などが出土しており、丘の南斜面に窯跡が存在することが知られていました。

大松沢丘陵(鹿島台から大衡に続く東西方向に低い山が連なる地形)の緩い斜面に立地するこの地域では、彦右工門橋窯跡のほかにも8地点で古代の窯跡が複数みつかっており、それらは総じて大衡窯跡群と呼ばれています(図1)。窯跡の年代は8世紀中頃から9世紀後半で、須恵器を中心に生産していました。

今回、遺跡内で国道4号拡幅工事が計画されたことから、工事に先立ち発掘調査を実施することとなり、令和元年度に調査を開始しました。令和元年度は、遺跡の南西端を調査し、土師器焼成遺構7基、鍛冶関係の土坑2基、木炭焼成遺構3基といった生産関連の遺構、瓦や大量の須恵器など周辺の窯でつくられた遺物を発見しました。

そして、今年度は昨年度調査区の北側を調査し、奈良～平安時代の竪穴建物跡8棟、掘立柱建物跡1棟、土師器焼成遺構10基、土坑2基を新たに発見しました。

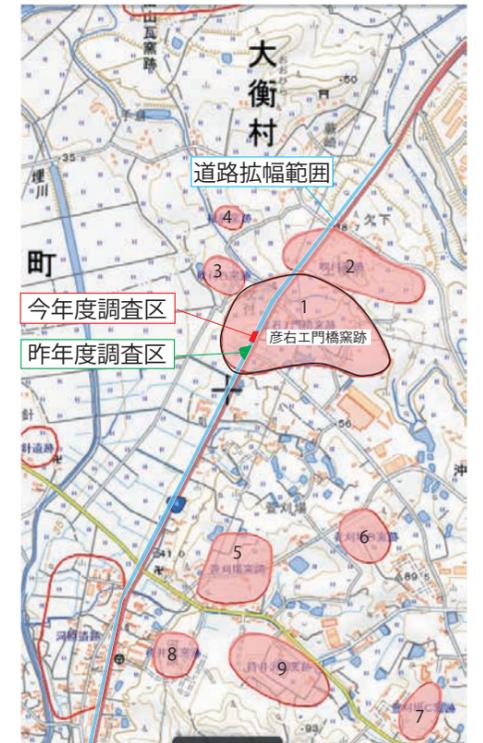


図1 大衡窯跡群

- 遺跡=過去の人々がつくったものや生活の跡(遺物・遺構)がある範囲
○遺構=建物跡や柱穴など土地に残された生活の痕跡
○土師器=浅く掘りくぼめた穴の中で焼かれた褐色で軟質の土器
○遺物=土器や石器など過去の人々が使った道具
○須恵器=斜面をトンネル状に掘った窯の中で高温で焼かれた灰色で硬質の土器

### 3. 発見された主な遺構・遺物

#### 【竪穴建物跡】

地面を1辺3～6m程度の方形に掘りくぼめて床面と壁をつくり、柱を立てて屋根をかけた半地下式の建物です。今回の調査では、様々な付属施設や遺物が発見されました。ロクロをすえた穴や材料となる大量の粘土が建物内でみつかったこと、土器が建物内の様々な場所でふんだんに使われていることなどから、土器づくりに関わる工人の作業小屋の可能性が高いと考えられます。

以下の項目で、竪穴建物跡の付属施設や発見された遺物について紹介します。

【カマド】竪穴建物の壁際に作り付けられています。SI25 建物跡のカマドは、使っていた当時の様子に近い状態で残っていました（写真2）。土師器の甕を芯材として使い、粘土を積み重ねて組み上げられています（写真3）。



写真2 SI25竪穴建物跡



写真3 SI25竪穴建物跡 カマド

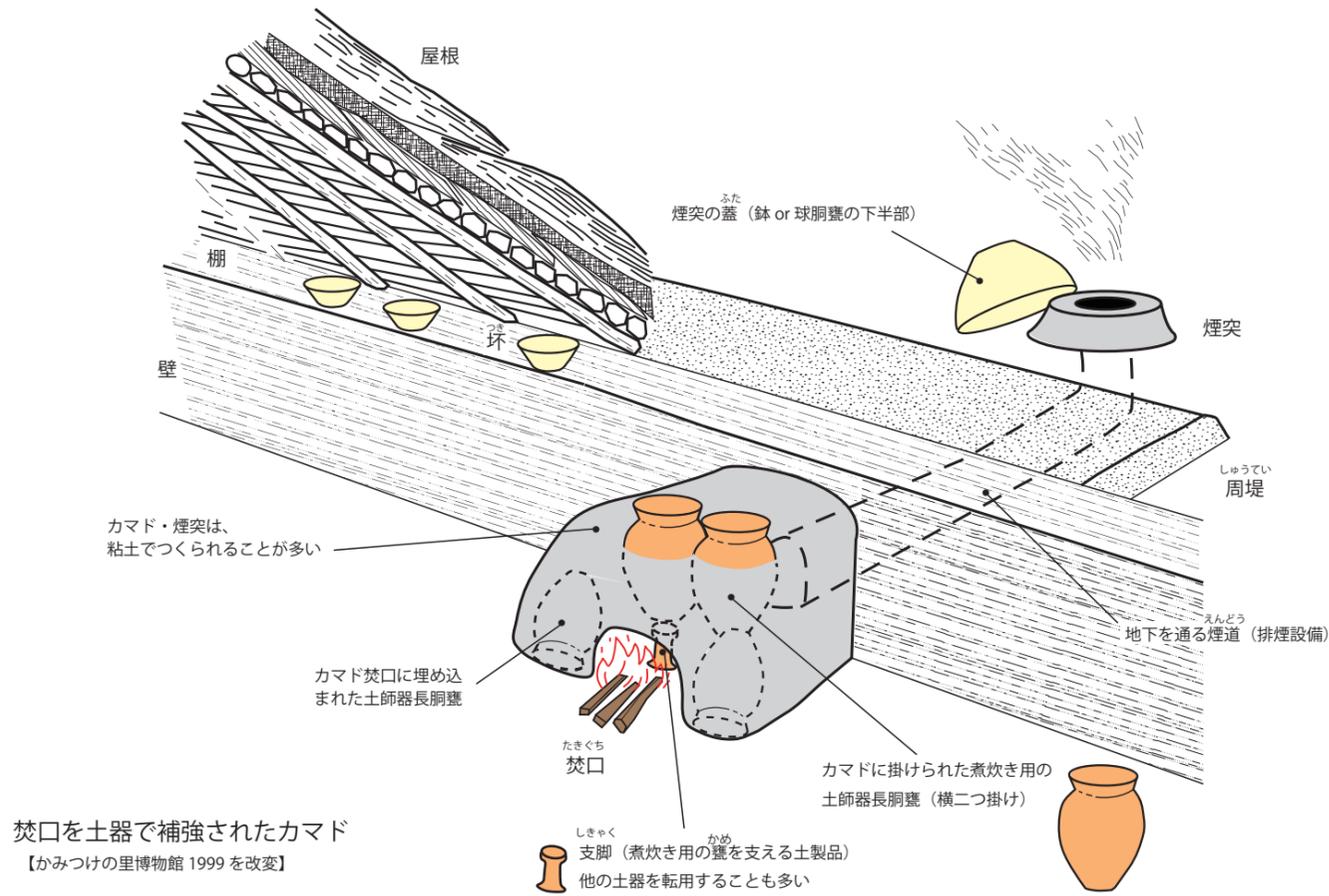


図2 カマドのイメージ図

【瓦を転用】調査区南東隅の SI29 では、床面から大量の土器が出土しました（写真4）。また、建物の壁際をめぐる排水用の溝（周溝）のふたとして、瓦がふんだんに使われていました（写真5）。



写真4 SI29竪穴建物跡 土器出土状況



写真5 SI29竪穴建物跡カマド付近 瓦出土状況

【ロクロピット】ロクロをすえていた穴が、SI24 で発見されました（写真6）。中央の穴に軸部分の棒を入れて、粘土を置いた台を回転させながら土器の形をつくっていました（図3）。



写真6 SI24竪穴建物跡 ロクロピット

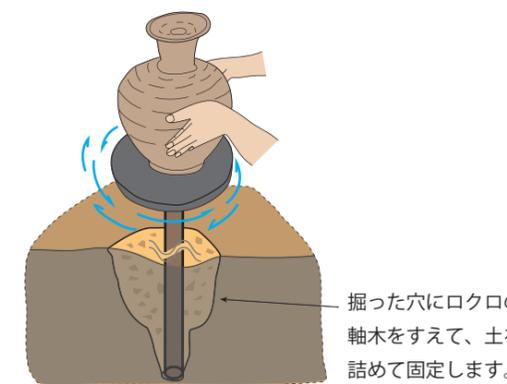


図3 ロクロのイメージ



写真7 調査区南端航空写真(上が北)

図4 調査区南端平面図(上空から見た図)